

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 江口 朗子

論 文 題 目

The Early Grammatical Development in Young Japanese Learners of English as a Foreign Language: A Cross-Sectional Study Utilizing Processability Theory
外国語として英語学習をする日本人小中学生の文法発達
—処理可能理論に基づいた横断的研究—

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	杉浦正利
委員	名古屋大学	教授	木下 徹
委員	名古屋大学	教授	山下淳子
委員	中央大学	教授	若林茂則

論文審査の結果の要旨

1 本論文の概要と構成

本論文は、英語を学び始めた日本語を母語とする若年の英語学習者（10～15歳）の初期の文法発達について、コミュニケーションタスクを用いて発話データを収集し、処理可能性理論（Processability Theory）の枠組みで分析を行った研究である。

本論文の構成は、9章から構成されており、添付資料として、被験者情報一覧・実験の同意書に加え、データ収集時のコミュニケーションタスクに使用したオリジナルの「絵カード」と実際の発話の書き起こしデータの例が添えられている。

第1章 Introduction

第2章 Research Background

第3章 Processability Theory

第4章 Empirical Studies based on Processability Theory

第5章 Research Questions and Hypotheses

第6章 Research Methodology

第7章 Results

第8章 Discussion

第9章 Conclusion

第1章の序論では、まず本研究の目的とこの研究を行う動機となった日本の英語教育と英語教育研究の背景が説明されている。2013年に文部科学省による「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が出されたものの、そうした改革をプランするのに必要な日本の英語教育の学習初期段階における基礎的な言語習得研究がほとんどなされていない現状の指摘があり、本研究においてコミュニケーションタスクを使った発話データを収集し、文法の発達を包括的にとらえるための枠組みとして処理可能性理論を使用することを説明した後、本論文の構成を説明している。

第2章では、本研究の背景となる日本における英語学習環境や学習者にとって第一言語である日本語と第二言語となる英語に関する言語学的な特徴、そして第二言語習得研究の発端となった文法形態素の習得順序と統語の発達順序に関する研究の概要をまとめ、そうした研究の流れの発展として Pienemann による処理可能性理論の提案が位置付けられることを説明している。

第3章では、本研究における第二言語習得理論の枠組みとなる処理可能性理論について、その基盤となるモデルと言語理論について説明した後、この理論の骨格である統語および形態素の処理可能性の階層に関する説明をしている。次いで、本理論の枠組みの中で近年 Di Biase らによって提案されたプロミネンス仮説（Prominence Hypothesis）を紹介している。

第4章では、処理可能性理論に基づきこれまで行われてきた先行研究を批判的にレビューしている。まず、処理可能性理論の発案者である Pienemann 自身らによる英語学習者のデータを分析した初期の研究、次に、日本語を母語とする英語学習者を対象とした研究、そして、プロミネンス仮説提案の根拠ともなった日本語を母語とする子供（5～7歳）の英語習得に関する縦断的研究（Di Biase et al.,

論文審査の結果の要旨

2015; Yamaguchi, 2010, 2013) を取り上げている。特にこの仮説に関して、それが基づく子供のデータがオーストラリアでの第二言語としての英語の習得データであることと、データ内の疑問文の発話量が少なく、このデータのみでは、プロミネンス仮説の一般化が難しいことを、平叙文の発達データの検証と合わせて疑問文の発達データを検証し指摘している。

第5章では、先行研究の批判的レビューに基づき、本研究で設定する5つの研究課題について、それぞれの課題に対する仮説とともに説明している。こうした研究課題のもと、日本において外国語として英語を学び始めた若年者を対象としたデータを収集し分析することで、これまでの処理可能性理論、および、プロミネンス仮説を検証していくことが述べられている。

第6章では、本研究における研究方法について、実験参加者、分析対象項目、データ収集のためのコミュニケーションタスク(言語活動)、分析のためのデータコーディングの体系、そして分析方法(分布分析、含意尺度法、習得基準、定型表現の操作的定義、言語発達の外的尺度)について詳細に説明をしている。

第7章では、その分析結果について、まず、言語発達全般の傾向について、つぎに、平叙文に関して基本語順と副詞の前置について、そして、疑問文に関して、Yes/No 疑問文と Wh-疑問文それぞれの発達と、この二種類の疑問文の発達の関係についてまとめている。言語発達全般については処理可能性理論の予測にほぼ合致すること、実験参加者が習得段階の第一段階から第五段階までに位置づけられること、そして、これらの習得段階は、他の統語的・語彙的な言語発達の外的尺度とも一致していることが確認された。平叙文の発達に関しては、今回得られたデータは概ね処理可能性理論の予測と一致するが、一方で、予測に反し、基本語順の習得後、ESL での副詞の前置に比べると、EFL である本研究の実験参加者は副詞の前置を行わないという傾向が観察された。疑問文の発達もほぼ予測通りであることが確認された一方で、プロミネンス仮説では取り扱われてこなかった Yes/No 疑問文と Wh-疑問文とが同時に習得されるという現象が観察されたことが報告されている。

第8章で、先行研究のレビューに基づき第5章で設定した研究課題について、統語の発達全般、平叙文の基本語順の習得、平叙文中の副詞の前置、プロミネンス仮説による疑問文の発達順序、そして、二種類の疑問文の発達の関係について議論している。特に特徴的であった連結動詞(copula)の過剰使用と省略に関して、母語である日本語の影響である可能性について議論している。また、副詞の前置が EFL で少なかった点について、日本における英語学習環境では目標言語でのインタラクションや実際の言語運用の機会が少ないために、話の流れを示すために談話機能上副詞を前置するという発話をするものがほとんどないからではないかと推測している。また、Yes/No 疑問文と Wh-疑問文とが同時に習得される現象については、表現の定型性とその頻度が影響する可能性を用例基盤モデル(Usage-Based Model)の先行研究を引用し議論している。

第9章で、本研究の知見をまとめ、本研究の第二言語習得研究への貢献と英語教育への貢献について述べるとともに、本研究の限界と今後の課題について述べている。全般的には、EFLの初期段階においても文法発達は処理可能性理論の枠組みにほぼ当てはまることが確認された一方で、処理可能性理論では取り上げられてこなかったが本研究で見出された次の2点 — 連結動詞(copula)と語彙動詞の習得過程が別である可能性、そして学習初期段階で定型表現の果たす役割が重要である可能性 — が、今後さらに検討されるべき研究課題であることを指摘している。そして、教育面では、ESLでは

論文審査の結果の要旨

日常的に行われているインタラクションが EFL では少ないことが、言語習得に影響を与えていることが指摘され、今後の英語教育の在り方への示唆となっている。最後に、今後の課題として、縦断データとの照合や、統語と文法形態素の発達の関連性ととも、統語発達における母語の影響の可能性のさらなる検証の必要性を述べている。

2 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- (1) 日本における英語学習初期の小・中学生を対象とした文法の発達研究のために5種類のコミュニケーションタスクを使い48名の発話データを収集し分析している。この学習初期段階の包括的な発話データは、早期英語教育に関する貴重な基礎的データと言え、今後日本の英語教育における早期英語教育の議論を根拠に基づきより科学的にすることに大いに貢献すると言える。
- (2) 第二言語習得の文法発達に関する包括的な理論である処理可能性理論は、文法習得に関する普遍的な理論として提案されているものの、その実証はまだ不十分であり、学習者の母語と学習対象言語の様々な組み合わせデータを使い世界各地で検証されつつある。その中で、日本語を母語とし英語を外国語として学習する初期段階の学習者を対象とした研究は管見の限りこれまでになく、本論文がはじめてそれを包括的に検証した研究と位置付けられる。
- (3) 第二言語習得理論として、処理可能性理論は文法項目の習得の基準をその生産的な使用が出現した時点としている。理論的には習得の基準点を定義し、その基準に基づき習得段階を位置付けるという枠組みであるが、生産的な使用が出現した時点で習得が完了しているわけではなく、本研究ではその後の習得過程も観察し分析をしている。これは処理可能性理論からすれば、理論の枠外のことであるが、実際の外国語の習得は、使い始めてすぐに習得が完了するわけではなく、その時点からその後いかに習得が進むのかという点こそが実際の習得過程であり、生産的な使用開始後の発達も視野に入れて習得過程を分析していることは、処理可能性理論を超える研究の可能性を秘めていると言える。
- (4) 処理可能性理論では、第二段階として文の基本語順の習得を位置付けているが、本研究では、文の基本語順をさらに各文型に分け習得段階を精緻に観察することにより、第二段階としてひとくくりにされている中にもさらに中間段階を想定することが可能でありまたそれが必要であることを指摘している。
- (5) 処理可能性理論の中で、新しくプロミネンス仮説が Di Biase らによって提案されたが、その提案の根拠となった日本語母語の ESL 英語学習者の縦断的データの分析と、本研究の EFL 英語学習者データとを比較分析することにより、同じ日本語を母語としていても ESL と EFL とでは習得過程が必ずしも一致しないことを実証している。また、プロミネンス仮説によれば出現するはずの WH in-situ というパタンの発話が、提案者の Di Biase らの ESL のデータでは見つからなかったが、本研究の EFL のデータで発見されたことを報告しており、この事例はプロミ

論文審査の結果の要旨

ネンス仮説を支持する証拠ともなっている。

- (6) プロミネンス仮説の検証のために疑問文の習得過程を精緻に分析したが、その過程で、これまで十分に検討されてこなかった連結動詞 (copula) と語彙動詞の習得に違いがみられ、上位の習得段階になるほど語彙動詞の使用が増えることを報告している。これは、逆に、連結動詞の習得は語彙動詞とは別の扱いをする必要があることを示唆している。この点はこれまでの処理可能性理論の研究ではほとんど手をつけられていない課題であり、本研究により具体的なデータでその違いを示した点は処理可能性理論に新しい展開を迫るものと言える。
- (7) これまでの処理可能性理論では、生産的な使用ではないということで事実上無視されてきた定型表現も綿密に観察し、その用法について使用頻度を考慮に入れ、生産的な使用と比較検討することにより、定型表現の使用により特定の言語表現の習得が促進もしくは抑制されることを報告し、言語習得上、定型表現の持つ積極的な役割について考察をしている。この点も処理可能性理論に対し、定型表現と頻度効果に関する再考を迫るものとなっている。

ただし、本論文は以下の点において今後改善すべき点があることが指摘される。日本語を母語としながら ESL か EFL かの違いにより、習得過程に違いがある点を指摘しているが、ESL 環境と EFL 環境とでどのような要因がその違いを生じさせているのかという点、特に比較対象した ESL 学習者と本研究の EFL 学習者の学習開始年齢の差に関する先行研究の調査が不十分であるため、本研究で収集したデータを使つての ESL と EFL との比較を通じた言語習得の相違に関する考察が弱く、ESL/EFL という環境の差だけでなく、学習開始年齢の差の影響あるいは、環境と年齢の差の交互作用の影響が含まれている可能性も完全には否定できない。また、習得過程における学習者の「誤用」に関して母語である日本語の特性が影響している可能性を議論しているが、日本語と英語との対照言語学的な先行研究の調査が不十分であるため、母語の日本語の影響の可能性を指摘するにとどまっている。また、処理可能性理論という言語習得理論面において、これまでの処理可能性理論では説明できない、もしくは、言及されていない現象の指摘はあるが、どのような理論的修正をすることで、そうした問題点が解決できるかという具体的な提案に欠ける。この点は、本研究が、第二言語習得理論の構築もしくは処理可能性理論そのものの精緻化を目的とするものではなく、日本の小中学生の英語の習得過程の包括的かつ体系的な観察と分析にあることから考えると、本研究の守備範囲に収まらず、今後の研究課題とも言えよう。しかし一方で、処理可能性理論にとらわれず、習得過程を記述することが主目的であったとすれば、処理可能性理論以外の枠組みで行われた研究についても、より広く調査・検討し、その上に立って「習得とはどのような認知的変容であるか」という根本的な課題を深く掘り下げるべきであったとも言える。

こうした限界はあるものの、日本語を母語とする外国語としての英語の初期学習段階における発話データを綿密に調査観察し、処理可能性理論の枠組みで、その文法発達過程を分析した研究として、第二言語習得研究に大きく寄与するものと評価できる。

論文審査の結果の要旨

3 結論

以上の評価により、本論文は、博士（学術）の学位に値するものであると判断する。